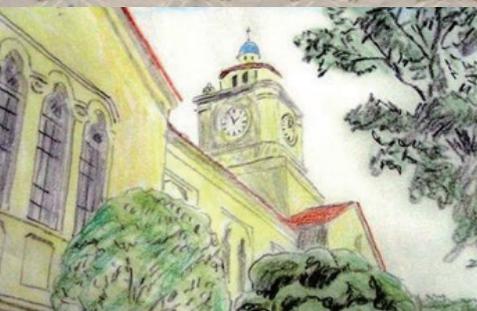


# Museum News



絵：柳田 基

## 2018 秋学期

### 展覧会

#### 平常展

Gift for the Future  
関西学院のあゆみ

—大学昇格を目指して・上ヶ原移転物語—

2019.1.15 (火) ▶ 4.6 (土)

1929年3月、学院は創立の地である原田の森を去り、上ヶ原にやってきました。この移転の背景には、高等学部学生会を中核として活発化した大学昇格運動がありました。関西学院の歴史において特筆すべき事柄である大学昇格とキャンパス移転にまつわるエピソードを紹介します。

## 2019 春学期

### 展覧会

#### 企画展

アンデスの布  
—チャンカイ・レースの技と美—(仮)

2019.4.15 (月) ▶ 6.15 (土)

関西学院大学博物館には、500点を超えるアンデスの染織品コレクションがあります。本展では、そのうちチャンカイ文化において製作されたレースを特集します。チャンカイ文化は、10～14世紀頃にペルー中部海岸のチャンカイ川流域を中心に栄えた半農半漁の海岸文化です。海岸砂漠地帯の墓地からは、膨大な量の織物が出土しており、多彩な染織文化の発達した様子がうかがえます。なかでも女性が髪にまとったレースは、羅や紗のような透ける布に織りや刺繍で文様をあらわしたチャンカイ独自の染織品です。その巧みな技とユニークな文様表現に焦点を当てた展覧会です。

## 限られた展示スペースをどのように活用するのか

# 固定化しない展示をめざして

### 代わり映えのしない展示？

本学の博物館の展示室は、わずかに3室、面積は235㎡です。博物館の展示スペースとしては、かなり狭いと言わざるをえません。この限られた展示室をどのように活用すればよいのか、毎回の展示で苦心します。

本館では、来館者を迎える最初の第1展示室に神戸原田の森と西宮上ヶ原のキャンパスのジオラマが設置されています。原田の森から上ヶ原への移転は、本学にとって大きな出来事でした。その象徴として2つのキャンパスのジオラマとそれを囲むように歴代院長の胸像が陳列されています。いわば関西学院を象徴する展示室です。しかし、常設物が多いため展示が代わり映えしないような印象を与えます。



第1展示室 2つのキャンパスのジオラマ

これに対して、第2・3展示室では、企画展と平常展を交互におこなっています。企画展は、春・秋学期に1回ずつ開催し、博物館が収集してきた歴史、文化、美術などの貴重な資料を公開したり、連携や共催による展覧会です。いっぽう、平常展は本学の歴史を主眼に置くことから、メインタイトルを「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」として、年に3回の展示替えをおこない、サブタイトルに変化をもたせて内容も変えています。しかし、毎年それを繰り返すと、どうしてもマンネリ化した展示になりがちです。

### 平常展と同時開催の特集陳列

そこで、平常展と同時に特集陳列を組むようにしました。特集陳列は平常展とは違った切り口や視点から展示を構成します。

最初の特集陳列は、2015年2月から5月にかけておこなった「時計台を描く」でした。時代を越えて描き続けられる時計台の絵を学内から集めて陳列、翌年には一粒社ヴォーリズ建築事務所が所蔵する上ヶ原キャンパスの建築図面を展示するなど、時計台の博物館にふさわしい企画を練りました。

また、新入生がキャンパスに溢れる春学期には、渡辺禎雄(1913-1996)の版画を通して聖書の世界を紹介する特集陳列もおこなっています。日本の文化風土に即して聖書の世界を描く渡辺の版画は、ユーモラスで暖かみを感じさせます。その親しみやすい版画から聖書を近くに感じてもらえれば、展示は成功です。

2017年には、第4代院長のC. J. L. ベーツの生誕140周年を記念した展示、続いて2018年にはベーツ院長が残したアルバムか



特集陳列

「第4代院長C. J. L. ベーツがのこした写真アルバムから」ら、明治・大正・昭和へ移り変わる日本を写した貴重な写真を選び出し、特集しました。

来年は、関西学院が創立して130年、大学博物館が開館して5年目という節目の年を迎えます。企画展、平常展、特集陳列を通じて、関西学院大学博物館ならではの展示に取り組んでいきたいと思っています。

(大学博物館長 河上繁樹)

# 展覧会報告 I

## 企画展

### ポスターでたどる戦前の新劇

今はなき大阪労演の貴重な資料を公開する展覧会の第3回となります。当館所蔵の資料の中から戦前の上演ポスターを選び、当時の新劇界の様相に迫りました。

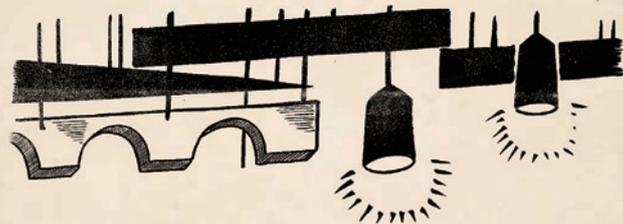
2018.6.4 (月) ▶ 7.21 (土)

9:30 ~ 16:30

※日曜休館、7月6、7日悪天候により臨時休館

開館日数 40日

入館者数 1,363人



ポスターでたどる

戦前の新劇



関西学院大学博物館

#### 様々な苦難と共に

#### 戦前の新劇界を取り巻く状況

1949年に設立された演劇鑑賞団体・大阪勤労者演劇協会（大阪労演）は、戦後関西の演劇公演に大きな役割を果たしてきました。2007年の解散の際、当館では同会が所蔵する演劇関係資料の散逸を防ぐべく資料群を一括して受贈し、その資料の整理・調査研究を進めてまいりました。その結果として、当館では2011年に「戦後演劇の世界 大阪労演とその時代 I 1949-1959」展、翌年に「新劇、輝きの'60年代 大阪労演とその時代 II 1960-1969」展を開催しました。大阪労演関連資料による企画展の3回目となります今回は、「戦前の新劇」をテーマに上演ポスターに焦点を当てました。

今回展示したポスターは大正期～終戦直後のものです。この時期は1923年の築地小劇場の設立を皮切りに様々な新劇団が生まれ、同時に国内で多くの劇作が書かれた時期でした。日本の近代劇としての熟成が始まった時期と言えるでしょう。また当該期はプロレタリア文学が流行していた時期でもあり、新劇界もその影響を強く受けていました。プロレタリア演劇は労



展示室内

働者を中心に広く受け入れられていきましたが、社会主義思想や共産主義思想に結びつきやすい性格から国家からの厳しい弾圧を受けることも多々あり、芝居には多くの制限がつけました。その後、戦争へと向かう時勢下において政治的な煽動にも利用されることもあり、戦時下には多くの新劇団が戦争のためのプロパガンダ演劇を公演することを強いられました。



築地小劇場公演ポスター  
1924年



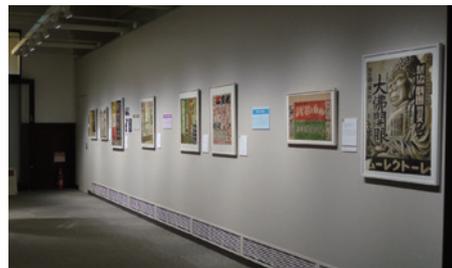
戦旗座・構成劇場共同公演  
ポスター 1931年

#### 広告は語る

#### ポスターについて

当館で受贈した資料群は大阪労演で保管されていたものですが、同会設立以前のものについては同会事務局長の岡田文江氏を始めとした大阪労演関係者の私物であったと思われます。上述の通り、戦前は取締りが厳しく、劇の台本に大幅な修正を迫られることや、上演が中止になることもありました。公演直前に修正が入るということも珍しくなかったようです。今回展示したポスターの中にも実際の公演とは異なる演目がかかれていたり、修正の跡があるもの、実際は公演が中止になったものなどがいくつかありました。ポスター1枚から様々な情報

を読み取ることができ、当時の新劇界を取り巻く情勢と演劇人たちの苦闘を感じていただける展示となりました。



展示室壁面展示

#### 開催記念講演会

#### 「戦前の新劇、戦争下の新劇、そして今」

6月23日には演出家・元近畿大学芸術専攻教授の菊川徳之助先生にご講演いただき、明治末期の新劇の萌芽から、戦前の新劇界が置かれていた状況、そして戦後から現代にかけての新劇の歩みを分かりやすくお話しいただきました。

明治末期にヨーロッパの影響を受け興った新劇は、日本の近代劇として大正時代に大きく発展しました。現代にも通用する劇作が数多く生まれたのもこの時期であると言えます。しかしながら徐々に戦争へと向かう情勢下での厳しい規制や、戦後のレッドパージなどにより自由な芝居が難しい状況が続きました。そして高度経済成長を迎え、娯楽の増加や観客の経済観念の変化によって新劇もそのあり方を多様に変えつつ今日に至ります。長く関西の演劇界でご活躍されてきた菊川先生ならではの観点で戦後の新劇が抱えた問題点なども語っていただきました。

# 展覧会報告 II

## 平常展

### Gift for the Future 関西学院のあゆみ

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。

#### 平常展 学院の息吹・原田の森

2018.4.2 (月) ▶ 5.26 (土)  
9:30 ~ 16:30  
※日曜、5月5日休館

開館日数 47日



創立当時の学生と教員 1891年

#### 平常展 学院を築いた4人の院長

#### 特集陳列 第4代院長 C. J. L. ベーツがのこした写真アルバムから

2018.8.1 (水) ▶ 10.20 (土)  
9:30 ~ 16:30

※日曜、8月11~21日、25日、9月17日休館、9月4日悪天候により臨時休館

開館日数 58日

#### 学院の息吹・原田の森

### 原田の森キャンパスの歴史を知る

関西学院は原田の森と呼ばれた地で創立しました。現在の神戸市灘区、王子動物園や神戸文学館のあるあたりです。この学院創立の地、原田の森にキャンパスが置かれた約40年の歴史をとりあげました。

アメリカ・南メソジスト監督教会は、伝道者養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として、関西学院を創立しました。創立者はアメリカ人宣教師である W. R. ランバスですが、後に第2代院長となる吉岡美国など日本人も複数協力しました。さらに、1910年にはカナダ・メソジスト教会も学院の運営に参画し、小さな私塾に過ぎなかった関西学院は大きく発展していきます。

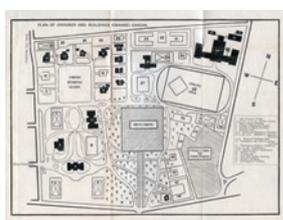
原田の森時代(1889-1929)には、学院の基礎となるカリキュラムや校舎などが整備され、校風も築かれていきます。展示では原田の森キャンパスの校舎配置図の変遷を紹介しました。カナダ・メソジスト教会が参画したことによって、資金面・教師陣が強化され、新たな学部開設や建築物が建てられたことが地図に如実に表れています。特に1910年以降、学院校地の東側の土地を購入し、キャンパス拡充が行われたことが注目されます。拡充された土地には中学部校舎が建設されましたが、1917年に焼失し、その2年後に再建されました。また、1918年に献金者の名を冠して建てられたハミル館は、現在、西宮上ヶ原キャンパスに移築されています。

キャンパス内には南北二寮があり、自修寮(北寮)で使われたオルガンを展示しました。その蓋には、舎監である中村賢二郎の「愛校狂」の文章が刻まれており、生徒たちの力で購入したものであることがわかります。

アメリカと日本、カナダの教会が協力して築かれていく初期の学院の様子と、教職員や学生たちの思いを感じとっていただける展示となりました。



原田の森キャンパス図 1909年



原田の森キャンパス図 1913年

#### 学院を築いた4人の院長

### 学院の草創期

創立者から第4代までの院長(W. R. ランバス、吉岡美国、J. C. C. ニュートン、C. J. L. ベーツ)を紹介しました。本学院は、ランバスの伝道と教育への情熱から出発しました。創立の地である原田の森から現在のキャンパスのひとつである西宮上ヶ原への移転や、学院の悲願である大学昇格など、理想を目指した彼らの働きによって学院は発展していきます。

また4人の院長とともに学院の創立を支えた院主中村平三郎もとりあげました。当初、実質的に外国人経営であった学院において、院主の中村は対外的な代表者・設立者でした。草創期の苦しい時期を支え、学院の精神的な礎をも築いた彼らの軌跡をたどりました。



開院之件二付御願 1890年



中村平三郎

#### 特集陳列

### 第4代院長ベーツがのこした写真アルバムから

第4代院長ベーツの孫アルマン・デメストラル氏所蔵の写真アルバム群より、1900年代から1940年代に日本で撮影された写真を中心に紹介しました。この写真アルバム群は、関西学院や来日宣教師の歴史、ベーツの人物像を知る上で重要な資料です。また、ベーツや友人・親戚たちの暮らしぶり、建築物や交通、社会福祉制度や社会保障が発達しなかった時代に活動していた社会運動家たちの姿など、当時を知る手がかりとなる情報が多く含まれています。

本展示では、新たな試みとして文化総部写真部に写真撮影の協力をいただき、ベーツアルバムにある上ヶ原キャンパスと現在の様子を比較しました。資料の保存と活用、未来への継承について、来館者の皆様とともに考える場となりました。



## 開催中の展覧会

2018年10月29日（月）～12月22日（土）

※日曜日、11月23日（金）休館

# 美術と文芸

## — 関西学院が生んだ作家たち — I

現在、大学博物館では、企画展「美術と文芸—関西学院が生んだ作家たち—I」を開催しています。創立から戦前期までの関西学院で青春時代を過ごした作家たちに焦点を絞って、絵画、詩、小説、音楽など各分野で活躍した作家について、彼らの作品、仲間との関わりを紹介する展示です。

本展覧会は、2016年に本学出身の洋画家大森啓助の作品が大学博物館に寄贈されたことを契機に企画されました。大森は在学中より絵画部弦月会で活動し、1920年の卒業後間もなく上京、金山平三に師事しながら川端画学校で西洋画技法を学びます。その後、1926年にフランスに渡って、約7年間の第一次滞仏時代を過ごし、画家としての道を歩み出しました。美術制作の専門教育機関をもたない関西学院では、学生たちは趣味として、或いはクラブ活動など仲間たちと集まって絵を描きました。高等学部商科（注1）を出た大森は、自らのことを「商科出身のエカキ」と称しましたが、学院には商科や文科出身のエカキさんたちが大勢いました。1932年のフランスからの帰国後、大森は東京にアトリエを構えて活動するため、神戸との関わりは希薄であったと思われるがちですが、卒業後、在仏中そして帰国後も神戸の画家仲間、関西学院の仲間達との接点がありました。また、本学出身の洋画家野口彌太郎や詩人の竹中郁とは在仏時期が重なっており、帰国後は神戸を舞台に先輩画家の神原浩や小説家の稲垣足穂を交えて同じ文化空間での活動が見られます。

こうした同窓のつながりは多方面に広がります。前述の竹中を始めとする文芸を愛好する学生たちの活動の場となった学内外の文芸雑誌では、春村ただをや北村今三といった創作版画の作家として活躍する面々の作品が表紙を飾っています。竹中の交流は、具体美術の吉原治良や朝日会館館長を務めた十河巖にもつながり、阪神間の文化活動を担った同窓が出揃います。このほか作曲家の山田耕筰、柳宗悦とともに民藝運動に力を注いだ寿岳文章、直木賞作家の今東光、また本学と関係の深い田村孝之介や小磯良平の作品も展示します。

展覧会場では、出品作品の図版と解説とともに文学部教授大橋毅彦先生ご執筆の論考などを

掲載した展覧会図録も販売しています。展示室への入場は無料ですので、お時間の空いた時に時計台2階の大学博物館展示室にお立ち寄りいただけますと幸いです。

（注1）高等学部は1912年から21年の間、関西学院に開設されていた学部で、文科と商科の2学部制であった。1921年に高等学部商科は高等商業学部、文科は文学部として独立した。

### 展示紹介

#### 第1章 大森啓助 商科出身のエカキさん

絵画制作ならびに翻訳本などの執筆活動にも励んだ大森啓助の仕事を紹介しています。学院に寄贈された戦後の大森の絵画作品を中心に彼の画業を紹介するとともに、卒業後に弦月会OBの仲間たちと神戸で結成した絵画と版画のグループ「月徒社」のことや、「神戸みなどの祭」（現在の神戸まつりのルーツのひとつ）との関わりなど神戸での活動やフランスでの交友を紹介いたします。



大森啓助《道成寺 段切れ》1960年頃か 油彩・キャンバス  
幼少時より観劇に親しんだ大森は生涯を通じて多数の歌舞伎絵を制作した。

#### 第2章 神戸、大阪 関西の文化を彩る作家たち



アメリカ博覧会ベナント前での記念写真 1950年  
前列左から竹中郁、小磯良平、後列中央が田村孝之介、後列右が十河巖。 ※上記4名の絵画作品も展示しています

関西学院ゆかりの画家の作品を紹介します。「具体美術協会」を結成した吉原治良、神戸モダニズム詩人の竹中郁、新聞記者を経て大阪の朝日会館館長を務めた十河巖など関西の文化創成に関わる作家の作品を紹介します。

#### 第3章 「個」と「つながり」 関西学院を中心にした作家のつながり

作家は個々に制作活動を行いますが、グループを作ったり、周囲の作家や仲間とつながりを持ちながら活動します。関西学院出身の芸術家たちのつながりを紹介します。



第4回県展に出品した前衛芸術グループDVLのメンバーたちと  
左から寺島貞志郎、岡本唐貴、浅野孟府、一人おいて飯尾弘、青山順三 神戸文学館所蔵 飯尾弘旧蔵写真アルバムより 1924年



『横顔』1号 浅野孟府（表紙）  
神戸関西学院文学部内横顔社  
1924年11月

県展の写真に写る飯尾弘と青山順三は竹中郁や坂本遼らと英文科の同級である。1927年に関西学院文学部英文科を卒業した彼らは、学院内の仲間だけでなく、学外の芸術家とも親しく付き合った。そうした芸術家の中には、当時関西学院があった原田の森近くに住んでいた浅野孟府や岡本唐貴といった前衛芸術家もいた。彼らは関西学院の学生が中心となって発行した雑誌の同人にも加わり、表紙画などを提供している。



関西学院大学博物館通信 第6号  
KGU MUSEUM NEWS No.6

2018.10.1

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ケ原一番町1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>